

令和 7 年度 宇和中学校 第 2 学期学校評価 自己評価書

西予市立宇和中学校



1 学校評価の考察

(1) 今年度前期（7 月）との比較から

今年度の 1 学期末の結果と、前年度同時期の結果を比較した。

今回の回答数は、教職員は県費負担教職員数「32 名」、生徒は 413 名中「352 名」、保護者は 375 世帯中「313 名」であった。回答の集約状況は概ね良好であった。「令和 7 年度第 1 学期学校評価アンケート」の教職員、生徒、保護者のそれぞれの質問の合計が上記の数「32 名」「352 名」「313 名」に満たない項目は、回答における選択肢の中の「0：分からない」を選んだ者の数を除いているためである。

結果については、項目によって微増・微減はあるものの、全体として「人権意識」や「命の大切さ」、「ふるさと学習」等の項目で高い評価を維持しており、肯定的な意見が多かった。一方で、「自発的な学習」や「授業の分かりやすさ」等において、学校側と保護者の評価に乖離が見られる項目もあり、家庭への積極的な情報発信が今後の課題と言える。教職員の評価における項目 17 の「業務改善」についても、前期 3.13 から後期 3.16 へと良好な結果を維持している。今後も引き続き、校務を整理し、教職員が働きやすい環境を整えとともに、保護者・地域との連携を深め、教育活動の充実に努めていく必要があると考える。

(2) 項目別考察「令和 7 年度後期分」

① 項目 1（校訓のような生徒の育成）

教員（3.65→3.56）と保護者（3.07→3.04）の数値が微減しているが、生徒（3.28→3.30）は微増している。教員の数値が最も高く、教育方針は明確だが、家庭への浸透にはまだ課題がある。学校だよりやホームページで、校訓に基づいた具体的な生徒の姿を写真付きで定期発信したり、生徒自身が「自分の行動が校訓のどこに当てはまるか」を振り返る時間を設けたりし、浸透を図りたい。

② 項目 2（学校に行くのが楽しみ）

生徒（3.20 維持）に対し、保護者（3.06→2.99）の評価が 3.0 を下回った。教員は「楽しみにしている」と捉えているが、家庭での様子に差がある可能性がある。不登校傾向や行き渋りが見られる生徒への早期対応として、教育相談の回数を増やす等、対策を講じたい。

③ 項目 3（自主的な学習）

全項目の中で数値が低く、特に教員（2.90→2.84）と保護者（2.83→2.77）の評価が低下している。生徒の自己評価（3.10→3.16）との間にギャップがある。家庭学習の「量」ではなく、自分で課題を見つける「質」に焦点を当てた自主学習ノートの実践等を図りたい。また、タブレット等を活用し、生徒同士が学習進捗を共有・賞賛し合う仕組み等を作り、学びの質の向上を図っていきたい。

④ 項目 4（分かりやすい授業）

生徒の満足度は高い（3.41）が、保護者の評価（2.88→2.82）が低迷している。授業の工夫が保護者に伝わっていないのが要因と考えられる。参観日だけでなく、様々なツールを活用し、授業の様子が家庭に伝わるよう工夫していきたい。また、「今日の授業で分かったこと」等を、生徒が家庭で話すきっかけづくり等にも取り組んでいきたい。

⑤ 項目 5（充実した部活動）

教員（3.17→3.32）の評価が上がった一方、保護者（3.03→2.92）の評価が下がっている。部活動ごとの活動計画や大会・活動の様子を、より積極的に保護者へ共有していきたい。また、生徒の意識調査に基づき、活動内容や人間関係の悩み等に配慮したミーティング等を部単位で実施し、部活動に対する充実感の向上に取り組んでいきたい。

⑥ 項目 6（話を聞いてくれる）

教員の自己評価（3.45→3.26）と保護者の評価（2.99→2.85）が共に低下した。教員の多忙化による余裕のなさが反映されている懸念がある。1人5分程度の「ミニ教育相談」等を定期化し、全生徒が対等に話せる時間を確保していきたい。また、業務改善を進め、放課後等の休み時間に生徒と触れ合う時間を捻出していきたい。

⑦ 項目 7（命の大切さ）

前後期ともに3.6～3.7台と非常に高く、学校の重点項目として成果が出ている。保護者も3.0以上を維持している。道徳や特別活動での実践を継続しつつ、他学年との交流を通じた「思いやり」の実践機会を更に確保していきたい。また、外部講師を招いた講演会の内容を保護者にも共有し、家庭での話題提供を行っていききたい。

⑧ 項目 8（いじめ・トラブルへの対応）

教員（3.56）と保護者（2.84）の間で認識に大きな乖離がある。学校が「対応している」と思っている、保護者には経過が見えにくい現状がある。トラブル対応の際、初期対応から経過報告、事後指導までの連絡をより迅速かつ丁寧に行っていきたい。また、守秘義務の範囲内で、「具体的にどう対応したか」を示していくよう努めたい。

⑨ 項目 9（分かりやすい情報発信）

保護者の評価が3.0を切っており（2.97）、学校からの情報が十分に届いていない、または分かりにくいと感じられている。ホームページの更新頻度を上げるとともに、スマートフォンで見やすいレイアウトにするなど、工夫していきたい。学校からの連絡アプリ「すぐーる」や、SNSの活用を検討し、リアルタイムでの情報提供を強化していきたい。

⑩ 項目 10（いけないことをきちんと指導している）

生徒の評価（3.66）が非常に高く、生徒自身が指導に納得感を持っている。なぜいけないのかという「理由」をセットにした指導を継続し、納得感を維持していきたい。また、毅然とした指導を行っている様子を学級通信等で保護者にも伝え、信頼関係を築いていきたい。

⑪ 項目 11（挨拶）

教員評価は改善（2.90→3.00）されたが、生徒の自己評価（3.40→3.30）と保護者評価が微減した。生徒会による「あいさつ運動」を地域住民や小学校とも連携して実施し、外部へのあいさつを強化していきたい。また、校内だけでなく、登下校時の地域でのあいさつを奨励し、地域からの称賛を生徒にフィードバックしていきたい。

⑫ 項目 12（清掃態度）

生徒（3.38）と教員（3.06）ともに3.0以上を維持しているが、微減傾向にある。清掃の重点箇所を明確にし、黙々と清掃する「黙掃」の意義を再確認したい。誰も見ていない場所でも手を抜かず、自分の役割を全うする経験は、周囲からの厚い信頼を得るための「誠実さ」へと繋がる。気を捉えてその意義を伝え、生徒の主体的な取組につなげていきたい。

⑬ 項目 13（人権教育）

保護者の数値が極めて低い（2.75）が、学校内（教員 3.56、生徒 3.41）では高い意識がある。生徒が作成した人権標語やポスターを地域や家庭に掲示してもらうよう依頼したり、人権参観日の実施や人権通信の発行を通して、学校で学んだ内容を家庭で話し合うための「問いかけ」を提示したりする等、取組を工夫していきたい。

⑭ 項目 14（ふるさと学習）

安定して高く評価されており、特に教員の評価が（3.06→3.17）と向上している。地域コーディネーターや外部団体との連携を更に深め、事前準備や外部交渉の一部を委託・分担し、教員が一人で抱え込む負担を軽減しつつ、保護者等からの評価の回復に努めていきたい。

⑮⑯ 項目 15（生活の心得）、16（服装規定）

服装規定において教員の評価が（3.29→3.16）と低下した。時代の変化に合わせた見直しの必要性が生じている可能性がある。生徒会を中心とした「校則見直し検討委員会」を更に機能させ、生徒・教員・保護者三者の対話の場を設けていきたい。また、なぜその規定が必要なのかという「TPO」の観点からの教育を強化していきたい。

⑰ 項目 17（業務改善）

3.13→3.16 と微増しており、意識的な取り組みが継続されている。行事の精査や校務の効率化を更に進め、業務が終わり次第「できるだけ早く退勤する」習慣を定着させることで、心身のゆとりを生み、生徒と向き合うためのエネルギーを最大限に確保していきたい。

2 具体的な今後の取組

(1) 学校全体での取組（改善点の明確化、意識改革の必要性）

令和7年度前期および後期の学校評価（項目1～17）を比較した結果、生徒の取組意欲や教職員の教育実践の質は概ね維持されており、学校全体として安定した教育活動が行われていることが確認された。一方で、以下のような傾向と課題も明らかになった。

ア 生徒の自己評価は概ね高水準を維持

多くの項目で、生徒は学校生活や学びへの満足度を一定程度高く評価しており、特に「命を大切にすること（項目7）」「わかりやすい授業（項目4）」「ふるさと学習（項目14）」「清掃への取組（項目12）」などの面で肯定的な傾向が見られた。これは、日頃の丁寧な教育活動の積み重ねや、生徒指導・授業改善等の努力が着実に実を結んでいることの証と考えられる。

イ 保護者評価にやや低下傾向

一部の項目では保護者評価に低下が見られ、特に以下の分野で顕著であった。

- ・ 学校方針や取組の「家庭への伝達」（項目9）
- ・ 学習意欲や部活動に対する実感（項目3・5）
- ・ 人権に関する家庭での対話（項目13）

これらは、学校内での教育実践が必ずしも家庭にまで届いていない、あるいはその価値が十分に伝わっていないことの表れである。今後は、「見える化」や「対話のきっかけづくり」により、家庭との信頼関係をより強固なものとする必要がある。

ウ 教職員の意識と努力の継続

教職員の評価では、道徳指導・人権感覚・生徒理解などにおいて高い自覚が示された。また「業務改善（項目17）」の数値も微増（3.13→3.16）しており、意識改革が進んでいる。一方で、「ふるさと学習」等の負担感や「あいさつの定着」などでは課題も見受けられ、持続可能な運営体制への見直しと、生徒と向き合うエネルギーの確保が求められる。

エ 全体としての改善課題と方向性

(ア) 発信力の強化（特に保護者・地域への情報共有）

学校通信やホームページ等の活用を工夫し、授業の様子や人権学習の内容など、家庭での話題に繋がる「伝わる広報」を強化する。

(イ) 主体的な学びと学校生活の質の向上

自発的な学習（項目3）の改善に向け、生徒の主体的な学びを促進する授業改善を推進するとともに、清掃活動等においても生徒が自ら目標を立て振り返る仕組みを構築し、内発的動機付けを促進する。

(ウ) 学校文化の再確認と持続可能な運営

あいさつ（項目11）や生活規範の意識付けを継続するとともに、負担の大きい「ふるさと学習」等の行事精査を行い、教育効果を維持しながらも教職員・生徒双方にとって持続可能な形へと見直しを図る。

(エ) 教職員の働きやすさと生徒へ注ぐエネルギーの創出

事務作業の効率化を徹底し、業務終了後はできるだけ早く退勤する文化を醸成する。これにより教職員の心身のゆとりを確保し、生徒一人一人と丁寧に向き合う教育実践へと繋げる。

(2) 学年部を中心とした「学校評価の考察と今後の取組」

※ 内が、前期の考察及び今後の展望です。下の太字が、後期学校評価と前期の考察及び実践を踏まえた、各学年部の考察になります。

＜3年部前期考察＞

項目2「学校に行くのが楽しみ」…学校へ行くのを楽しみにしている生徒が多くなっていることより、水曜校時などの日課表の工夫、サポートルームなどの対応が実を結んでいると考える。

項目13「人権教育」…学校教育の中では人権教育の推進はできているが、家庭に持ち帰ってまで共有するには至っていないのが現状である。

→2学期に向けた戦略

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 生徒たちが主体的に活動したくなるような、教員の声掛け、授業の工夫をこれからもしていく。
 - その時だけにならないような人権教育や人権に関する情報の発信をしていく必要がある。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 3年生が思う存分、行事等で活動できるよう3年部で見守る。また、進路については不安を抱いている生徒には声掛けをし、教員同士で情報を共有しながら、細やかな指導を心掛ける。
 - 日頃から道徳の授業や学級活動において、人権感覚を養う教育を行い、正しい知識や情報を伝えていく必要がある。

＜3年部後期考察＞

項目2「学校に行くのが楽しみ」について

【考察】

- 進路・入試に伴う心理的負担の増大：入試が近づきテストが続く中で、勉強や進路へのプレッシャーから学校へ行くのが「しんどい」と感じる生徒が増えている。特に、入試を意識した授業スピードについてこれない生徒への配慮が不足していると考えられる。
- 行事終了後の虚脱感と不安：大きな行事が終わり、進学・進級への漠然とした不安から、学校生活に楽しみを見出せなくなっている状況が推察される。
- 評価のギャップと発信不足：生徒自身の肯定感は横ばいだが、教員や保護者の評価数値が下がっており、特に保護者の数値が低い傾向にある。学校で楽しく過ごしている生徒の様子が保護者へ適切に伝わっていない可能性が考えられる。

【今後の取組】

- きめ細やかな個別支援：不安の強い生徒に対して、学級担任だけでなく全体で協力し、個別の相談や「思いを聞く時間」を確保して緊張をほぐし、安心感を高める。
- 授業の質の転換：詰め込み授業にならないよう時間をかけて指導し、「学び合い」を取り入れるなど生徒が主体的に活動できる授業づくりを目指す。
- 保護者への積極的な情報発信：懇談会や学級通信、ホームページなどを工夫し、生徒が学校で楽しく過ごしている様子を積極的に伝え、保護者との認識の差を埋める。

項目 13「人権教育」について

【考察】

- 具体的取組による成果：人権参観日や人権学習、集会などの分かりやすい取組が、生徒や保護者が人権について考えるきっかけとなり、数値の向上に寄与している。これは日頃の道徳教育や一人一人を大切にした声掛けの成果でもある。
- 言葉遣いと SNS の課題：SNS 上で氾濫する粗暴な言葉遣いなど、日常生活におけるコミュニケーションの在り方に課題が見られる。
- 保護者への啓発の必要性：保護者の肯定的な回答が数値的にまだ低いため、生徒だけでなく家庭に対しても更に人権意識を投げ掛けていく必要がある。

【今後の取組】

- 家庭との連携強化：人権学習の様子を配信する等、家庭で人権について話すべききっかけとなるような（負担のない範囲での）課題を作成し、学校での学びを共有する。
- 日常的な啓発の継続：授業や掲示物を通じた啓発に加え、日頃の会話の中で思いやりや人の気持ちを大切にすることなど、「人として大事なこと」を継続して語りかけていく。
- 参観日の継続と対話：人権教育参観日を継続し、保護者に対する啓発の機会を維持していくとともに、SNS の言葉遣いなどについても生徒に考えさせる機会を設ける。

< 2 年部前期考察 >

項目 3「自主的な学習」…学習の必要性を感じていなかったり、やらされている意識が高かったりして、学習に向き合うことがなかなかできないのではないかな。

項目 13「人権教育」…保護者が子供と話をしていないというのは、人権教育の捉え方にもよると思う。難しく考えず、挨拶や言葉遣い、友達との関わり方等の話も人権教育につながる。

→ 2 学期に向けた戦略

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 学習にどのように取り組ませるのか、どのような配慮を行うのかなどは、各学年部で情報交換をしながら連携して行っていきたい。
 - 教師は、定期的に人権教育を意識して学ぶことが大切だと思う。夏休みの研修はとてもよかった。一度では忘れてしまうので繰り返し、教員も学び直しが必要だと思う。人権参観日をメインに考えるのではなく、日頃から人権に関する知識・情報を得ることで、人権感覚を磨いていく。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 2 学期を迎える前に、宿題が終わった状態になるように、学年部で配慮生徒に声掛けを行い、学習の場を設定している。「やってよかった」「わかった、できた」という気持ちを少しでも感じさせ、いろいろなことから逃げない生徒にしていきたい。ただし、特別に配慮のいる生徒については、生活面を整えさせたり、進路について考えさせたりすることも並行して行うことが必要ではないかと思う。
 - 学年集会等では、問題が起こった時に開いて指導することが多いが、月 1 回は集会をして、人間関係づくりの活動を取り入れるなど人権意識を高める活動ができればよいと思う。

< 2年部後期考察 >

項目3「自主的な学習」について

【考察】

- キャリア教育による意識の向上： 2年生は全体的に学習意識が低い傾向にあったが、早期の進路情報提供や進路集会などを通じて、「自主的に学習しなければならない」という意識が少しずつ芽生え始めている。
- 評価のギャップと内容の難化： 生徒自身は自己の取組を前向きに評価している一方、教員や保護者は「もっとやれるはずだ」と厳しく評価しており、認識の差（ギャップ）が生じている。また、学習内容の複雑化やテスト結果の影響で、大人側の評価が前期より下がる傾向も見られる。
- 「やらされる宿題」から「自分から進んでする学び」へのステップアップが課題である。成績という結果だけでなく、生徒が「自分に何が必要か」を考えて主体的に取り組んでいるかという、学習のプロセス（質）に注目していく必要がある。

【今後の取組】

- 進路意識の継続的な刺激： 受験を控えた3年生の様子を伝えたり、先輩の受験情報を共有したりすることで、1年後の自分を具体的にイメージさせ、進路に対する危機感と意欲を醸成する。
- 学習習慣の定着と課題の再考： 基礎基本の定着を優先し、学習方法そのものを身に付けさせる指導を継続する。また、単に量を出すのではなく、生徒の意欲が湧くような課題の出し方を再検討する。
- 個別の状況に合わせた声掛け： 個々の生徒によって課題の受け取り方が異なるため、それぞれの意欲に応じた継続的な働き掛けを強化する。

項目13「人権教育」について

【考察】

- 集団での学習による刺激： 学年合同での道徳や人権学習（人権の歴史、同和問題、ハンセン病学習など）を通じて、他学級の生徒の意見に触れる機会が、生徒にとって良い刺激となり意識向上に繋がっている。
- リーダーシップの発揮と行動の変容： 各種行事等でリーダーシップを発揮する生徒が増え、周囲への接し方や話し方が改善されてきたことが、数値の向上に寄与していると考えられる。
- 指導の継続性と言葉の重み： 現状では「人権参観日前後の学習」など、指導が一時的なものに留まっている。また、一つの内容に対して一度きりの指導で終わってしまっている面も課題である。

【今後の取組】

- 教員の意識向上と対象の拡大： 同和問題やハンセン病だけでなく、障がいのある人、LGBT、外国人など、より身近で多様な人権課題について教員自身が研修を深め、指導の幅を広げる。
- 日常の言動への落とし込み： 特別な授業だけでなく、日々の何気ない発言や正しい行動が周囲に良い影響を与えることを伝え、日常生活全般における人権意識を高める。
- 多角的な場面での啓発： 友人関係など様々な場面を捉え、人権を大切にする気持ちを継続的に高めていけるよう、年間を通じて啓発活動を継続する。

＜1年部前期考察＞

項目3「自主的な学習」…生徒自身が何をしたいのかわからない状況なのではないか。適宜、教師側が教えることも必要なのではないだろうか。

項目11「あいさつ」…学校全体としてあいさつに力を入れていこうとする姿勢が生徒には身についていると思う。ただ、それが周りの人から見たときに、あいさつができていたということが難しい状況なのだと考える。

→2学期に向けた戦略；

- ① 学校全体で取り組んだら良いと思うこと。
 - 夢や目標を持つ生徒が減ってきているように思う。その結果、何のために学んでいるのか、やる気が出ない無気力な雰囲気を感じるため、つながりのある進路学習を1年生から行う。
 - 朝のあいさつ活動などの時間や参加について、工夫ある活動を行う。
- ② 学年部を中心として取り組んでいくこと。
 - 学習委員会を中心に、学習の内容をもとに一問一答などを作成し、学年掲示などに貼る。解答をめくれるようにし、QRコードで読み取ると解説が見れるなど、工夫した学習コーナーを作る。
 - 各クラスで授業前後のあいさつや出会った人への挨拶の態度など、実際の生徒の行動をみて、定期的に指導やフィードバックを行う。

＜1年部後期考察＞

項目3「自主的な学習」について

【考察】

「自立（形だけの学習）」から「自律（目的を持った学習）」へのステップアップにおいて、以下の課題が浮き彫りになっている。

- 「作業」と「学習」の混同：ノートを綺麗にまとめることや、指定された時間、机に向かうこと自体が目的化しており、内容を深く理解しようとする「思考の深さ」に欠ける傾向がある。
- ツールの使いこなしの格差：ICT機器や参考書を与えられても、それを自分の弱点補強にどう繋げるかという「戦略的な活用」ができる生徒と、ただ眺めるだけの生徒で二極化が進んでいる。
- 短期的な成果への固執：定期テスト等の目の前の数値に捉われ、長期的なスキルの定着や「知る喜び」を追求する姿勢が十分に育まれていないという構造的な問題がある。

【今後の取組】自律を促すためのアプローチ

- 「問い」の質の改善と共有：生徒が学習中に「自分に対してどのような問いを立てたか（例：この公式はなぜここで使えるのか？）」を可視化させる。良い問いの立て方をクラス全体で共有し、思考のモデルケースを示す。
- データの活用による客観的な自己分析：学習時間や正答率などのログを生徒自身が分析し、「自分の得意・不得意」をデータに基づいて把握する機会を設ける。根拠のある学習計画の修正を促す。
- アウトプット型の学習への移行：インプット（読む・書く）に偏った自習から、他者に説明する、要約する、類題を作成するといったアウトプット型の活動を推奨する。これにより「分かったつもり」を防ぎ、深い定着を狙う。

項目 11「あいさつ」について

【考察】

生徒たちのあいさつの実態を分析すると、単なる「声の大きさ」の問題だけではなく、「相手を意識したコミュニケーション」としての質に課題が見える。

- 「反応的あいさつ」の定着：先輩や教員から言われれば返すが、自分から進んで（先手で）あいさつをする生徒は一部に留まっている。あいさつが「自発的なマナー」ではなく「ルールへの対応」になっている現状がある。
- 非言語要素の不足：声は出ている、相手の目を見ない（アイコンタクトの欠如）や、立ち止まらずに通り過ぎながらといった、「形だけ」のあいさつが散見される。
- 関係性による格差：親しい友人同士では活発だが、教職員や地域住民、あるいは他学年の生徒に対しては心理的な壁があり、相手によってあいさつの質が変動する傾向がある。

【今後の取組】「あいさつ」を活性化させる施策

- 大人の「先手」によるモデル提示：教職員や保護者が生徒より先に、笑顔で具体的な言葉（「おはよう、今日の授業も楽しみだね」など）を添えてあいさつを行う。「大人からされるから、自分も返す」というポジティブな連鎖を作る。
- 生徒主体の「あいさつ運動」のアップデート：委員会のルーティーン作業としてのあいさつ運動ではなく、例えば「全校生徒の名前を呼んであいさつする期間」を設けるなど、相手を意識したイベント性を加える。
- 「あいさつの価値」の言語化：学級活動などを通じ、「なぜあいさつが必要か」を議論する。単なる礼儀としてではなく、人間関係を円滑にする「心のドアを開く鍵」としての重要性を生徒自身の言葉で再定義させる。
- 賞賛の文化：気持ちの良いあいさつができた生徒や場面を、学級通信や朝の会、終わりの会で具体的に紹介・賞賛し、「良いあいさつが価値を生む」という空気感を醸成する。